

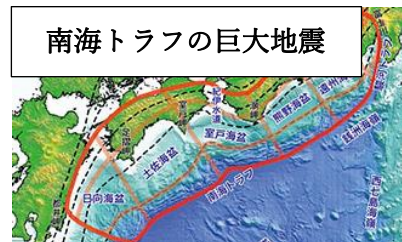
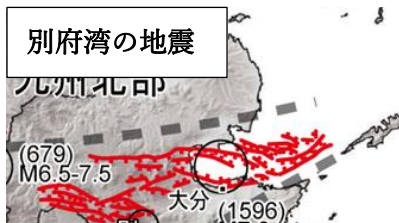
「色」の活用は、児童の地域感をいかに高めるか:防災教育の視点から

「自然災害に上限はない、何よりも人命」→「地域への関心と学びが自然災害から命を守る」

照山龍治(代表、2011年度県防災計画再検討委員長)*、木村典之(県教委次長)*、幸野洋子(県幼教センター)*、山崎朱実(教諭)*、
宮里耕太(研究家)*、塩月孝子(県芸術文化スポーツ振興財団)*、秋田喜代美(学習院大学教授)、*印は研究会の会員

1. 研究の背景

(1) これから大分県を襲うであろう三大地震(地震調査研究推進本部資料より)



(2) 最大津波高想定(m)、想定震度(震度6弱以上)、到達時間(時間・分)※大分県地域防災計画より

市町村	南海トラフの巨大地震 M9 (2012内閣府モデル)			周防灘断層群 (主部) M7.6			別府湾の地震 M7.8 (慶長豊後型地震)		
別府市 北的ヶ浜	4.61		1時間 48分	1.41		1時間 25分	5.42	7	40分
国東市 安岐	5.23		1時間 32分	1.77	6強	1時間 0分	4.56	7	18分
姫島村 西浦港	2.81		5時間 31分	5.06		16分	2.24		2時間 17分

震源が同じでも、被災想定は地域で異なる

(3) 大分県地域防災計画では

- ①東日本大震災での「防災教育の有無が子どもたちの生死を分けた」という実例を踏まえ、「学校と地域の防災教育が相互に補完」「先人の知恵を受け継ぐ」「県土の自然の特徴を理解」「高い防災意識を維持」「児童も地域の一員、避難場所を理解することが必要」と記載。
- ②東日本大震災の避難者から、「小学校低学年の頃、地震の時、海の近くは津波が来るから高いところに逃げると教えられ、その記憶が地震・津波から私を助けた」という証言もあった。

つまり、地域の自然(自然災害)、歴史(災害史)、文化(災害伝承碑)への関心と学びが、自然災害から子どもたちの命を守るということ

当研究会の研究活動の目的は、色から始まる探究学習。つまり、「色を活用した地域の学び」の仕組みづくりと効果検証

2. 研究の目的と方法、結果

研究会の地域の色の実践と学びが、防災計画の地域(自然環境、災害史等)への関心と学びに、「有効か?」を検証するため、研究協力校で検証実践、また、幼小中学校等で研究会の教材配布のうえ有効性調査、加えて、自助・近助・共助に向けては子どもたちの地域感調査を行った。

(1) 研究協力校では

泥染め等「色の実践」を取り入れることで、授業に関心がなく、クラスから外れていた児童が、地域の学びに向かい、クラスをリードするようになった→検定教科書掲載

色活用の地域学習材	2024年度文科省検定済教科書「図画工作3・4下」開隆堂 P57

(2) 都市部(別府市)の教育機関では

「色の実践」は、「地域の学び」に有効か? 「授業づくり」に有効か? →教材配布の上、調査

21 幼小中+市教委→全て「有効」「少し有効」と回答→市教委の地域学教員研修に泥染めを入れた

(3) 離島・漁村部(姫島村)の教育機関では

「色の実践」について、別府市と同様の質問

全幼小中+村教委→全て「有効」と回答→小学3・4年で
検証実践→「もっと姫島のことを家族で話し合う」

(4) 子どもたちの地域感と変化

① 色の実践と学習による地域感の変化

別府市の象徴で多彩な地獄が校区に有る A 小学校と、無くて A 小学校校区に隣接する T 小学校を対象に、自分の「地域の色」を聞いた。

結果、「地獄の色」と答えたのは、A 小学校が7割弱だが、T 小学校は1割強、小学生は、「自分の地域」は「小学校区」と見ているようだ。しかし、「実践と学習」により、T 小学校は、「地域の色」を「地獄の色」と見る割合が、5割、8割と大きく増加した。
つまり、子どもたちの地域感が広がったようだ。

🔥T 地獄

🔥U 地獄、🔥B 地獄

別府市

A 小学校

T 小学校

地獄とは⇒多彩な「色」を持つ温泉の泉源
⇒海地獄、血の池地獄、坊主地獄等

地域の色を地獄や温泉の色とした割合

学 校	A 小学校	T 小学校
割 合	67.0%	13.6%

実践・学習で T 小学校の地域感が変化

経験年	0 年	1 年	2 年
割 合	13.6%	45.0%	83.0%

② 市町村域を超えた地域感の変化

別府市と国東市、姫島村の小学校で地域間交流

別府と国東の協力校で、「別府の地獄染めと国東の世界農業遺産シチトウイの栽培・ミサンガ作りの実践」と「地域の学び合い」、「オンライン交流授業」を実施、

さらに、別府と姫島の協力校でも、「別府の血の池地獄と姫島の拍子水温泉の泥染め実践」と「地域の学び合い」を行った。

結果、関心がなかった相手の市町村を強く意識し始め、比べることで自分の「地域特性」を確かなものにした。加えて、質疑応答の中で、国東と姫島で「地獄めぐりをしたい」、別府で「シチトウイを育てたい」等、地域感は、市町村の外にも広がったようだ。



3. 考察

- (1) 地域の色の実践が、児童の地域への関心と学びに有効である可能性が示唆された。
- (2) 地域防災計画の「学校と地域の防災教育が補完し合い、先人の知恵を受け継ぎ、県土の自然の特徴を理解する」という防災教育の在り方に、色の実践が効果をもつ可能性が推察できた。
- (3) 色を共通テーマとした地域間交流は、児童の視野を広げ、地域間の互助・近助・共助という防災意識を育む上で効果的な取り組みの一つになりうることを確認できた。

4. 今後の課題

地域の色への意識が防災意識といかに繋がるかの精緻な検証が今後の課題である。そのため、昨年度末、学習材「ふるさとのうみとそら(地域防災)」を作成、今年度は、精緻な検証を実施